

自分と卓球とのかかわり

北野嘉久

1980年東京工業大学卒

自分たちの代は東京大学の全盛期であったこともあり、全国国公立大学大会には出場していませんが、自分と卓球とのかかわりについて述べたいと思います。

自分が卓球と関わったのは小学校4年頃だったと思います。父が卓球台を購入し、雨天でも車庫で遊ぶことができました。ほとんど家族や友達との遊びでしかなかった卓球とのかかわりが、中学に入り劇的に変わりました。

茨城県の水戸市にある私立中学校に入学し、その卓球部に入部しました。とりわけその卓球部は県内有数の強豪校で自分が入学する前年は県大会個人戦チャンピオンが生まれた卓球名門校でした。(そのチャンピオンだった先輩はのちに東京大学に進学され、同大学卓球部で同年の田中さん、伊藤さんらと黄金時代を築かれた庄司さんでした。)

当時(1970年代)は1960年代から続いていた「卓球ニッポン」の名の通り、世界選手権では団体、個人ともに多くの金メダリストを輩出していた時代で、中学の運動部の中でも卓球部の人気は高く、新入生250人のうち40人近くが入部していました。しかし県内有数の卓球名門校の名前の通り、練習は平日15時30分から18時まで、さらには土日・夏休みも毎日練習で、その内容も厳しく、1年の秋には40名いた新入部員も4人に減ってしまいました。中学時代の私の戦績は市の団体戦優勝のみで、県大会では勝てませんでした。

高校は登山部に入ったため一時的に卓球とは離れましたが、大学に入って、再度卓球に取り組みました。自分が再度卓球にのめりこんだのは大学卓球部同期のキャプテンに卓球の面白さを伝授されたこと、さらには中学時代の先輩が東京大学で大活躍されていた影響が強かったと思います。当時の東大卓球部は関東学生の3部上位で、特に庄司・田中の両選手は2部との入れ替え戦でも関東学生トップクラスの選手と互角の勝負をされていました。自分は高校時代卓球から離れていたため、そのブランクは大きく、大学1・2年の時は団体戦のレギュラーにはなれませんでした。3年から関東学生リーグ(東工大は4部)団体戦に出場しはじめ、4年生になって春秋のリーグ戦では合計9勝することができました。自分達の1級上は実力者が多かったのですが、自分の代や1級下は実力がまだまだで、自分が頑張らないと5部にも落ちかねないという危機感から、2年生後半から集中的に練習に明け暮れたという記憶があります。その

危機感もあったせいか、4年生時は4部で2位となり、3部との入れ替え戦までもう一步というレベルにまでなりました。一つのことに熱中する、集中するということが大切と学びました。

大学院修士課程卒業後川崎製鉄（現 JFE スチール）に入社しました。川崎製鉄を就職先として選定した動機の一つは卓球実業団リーグで川鉄千葉の名で卓球専門部が活躍していた点もあったと記憶しています。その専門部では関東学生リーグ時代から知っていた日大の清水選手（80年卒）や中大の村上選手（81年卒）らが活躍しており、同期82年卒では日大海鋒選手、さらにその後輩では明大卒糠塚選手や渋谷選手など日本を代表する選手が入社されて日本卓球界をリードされ、活躍していました。諸般の事情により、1995年に川鉄卓球部は休部となりましたが、翌年に自分が発起人としてクラブチーム結成を提言し、千葉県の卓球界に少しでも川鉄千葉として貢献してゆこうという思いでかつての名選手の賛同を得て発足しました。全国クラブチーム選手権には千葉県代表して8年連続出場し、現在でも皆60歳を越しましたが、全国クラブチーム選手権や全国シニア大会で活躍していますし、地域のママさんチームの指導などもしています。このクラブチーム活動の中でいまでも記憶に残っているのは、自分が40歳の時に千葉県八千代市のオープン大会の団体戦決勝戦で我がクラブチームと長谷川信彦さん（当時50歳）率いるチームが対戦した試合です。準決勝まで我がチームのメンバーの活躍もあり、決勝まで進むことができました（自分は出場していません）。決勝戦ではぜひ自分が長谷川さんと対戦したかったので無理を言ってオーダー交換前に長谷川さんを1番目に出てもらおうようお願いし、自分と対戦して頂きました。当時は21本3セットマッチで各セットともテンハン（10本以下）でしたが、あの全盛期を彷彿とさせる一本差しのバックハンドとエンドラインぎりぎりに来るロビングはこちらが何発スマッシュしても球が返ってくるので肩が抜けるかと思いました。かつての世界チャンピオンと対戦できたという素晴らしい思い出を我がチームはプレゼントしてくれました。

現在は自分も60歳後半となり、自身の健康のために本年に入って卓球に再度チャレンジを始めました。15分程度連打しては休憩を取りながらやったりが継続できるようになりました（練習相手はかつての実業団選手なのでラリーは続きます）。また今年は2月の日本選手権、3月のTリーグプレーオフ、8月のTリーグ開幕戦なども観戦し、卓球熱を復活させています。今後は日本卓球界発展に役立つことは無いか？貢献できることは何か？なども考えてみようと思います。